



Title	在日朝鮮人語としての日本語, その原点とゆくえ
Author(s)	丁, 章
Citation	越境文化研究イニシアティブ論集. 2020, 3, p. 23-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パネルセッション

越境する言葉—金時鐘を読む—

(発言者：丁章，宮沢剛，CATHERINE RYU)

在日朝鮮人語としての日本語，その原点とゆくえ

丁 章

丁章です。よろしく申し上げます。今日は金時鐘さんの生誕 90 年と渡日 70 年を記念するシンポジウムということで、このような光栄な場にパネリストとしてお呼びいただきありがとうございます。

それで、さて何からお話しようかとおもうのですが、まず何よりも、金時鐘さんの卒寿をお祝いしたいとおもいます。先生、おめでとうございます。よくぞ 90 歳まで長生きしてくださいましたと、私は心からお礼を言いたい気持ちです。こんなふうに言うと、長寿のお祝いならともかく、なんでお前が金時鐘さんの長生きに感謝する必要があるのかといふかる向きもあるかも知れませんが、金時鐘さんの言葉に自らの人生を支えられた私にとっては、金時鐘さんが長生きされるということは本当にありがたいことなのです。今日ここにお集まりのみなさんの中にも私と同じように、金時鐘さんの言葉を自分の人生の支えにしてこられた方はたくさんおられるのではないのでしょうか。いかがですか。

文学の言葉、詩の言葉というのは、読者の人生をも変革してしまう力を持っているものとおもいますが、それは一人の作者の言葉が、読者という他者の人生に影響をもたらす力を持っているということ、今日のテーマは「越境する言葉」ということですが、つまり、自己と他者、または個々の人々の間を越境してゆく力という意味で、まずはその意味からも金時鐘さんの言葉が紛れもなく「越境する言葉」であると言えるかとおもいます。

近頃、この日本では「令和、令和」と騒がしいのですが、昭和や平成天皇のその「お言葉」には、私はちっともありがたいとおもえないし、人生の感動を受けることもありません。むしろ逆に、この令和騒ぎには腹立たしさのような気分を覚えるくらいなのですが、そのような違和感や抗いの想いを私が抱けるのも、私が金時鐘さんの言葉に影響を受けた人間だからだとおもいます。私のように日本で生まれて日本人のように育てられた在日コリアンは、朝鮮の文化や歴史よりも君が代や日の丸のほうが身近にあって染まりやすく、もし私が金時鐘さんの言葉と出逢っていなければ、私は在日朝鮮人を生きるどころか、今頃世間と一緒に「令和、令和」と浮かっていたかも知れません。そうおもうと本当に恐ろしいかぎりです。

そんな私が金時鐘さんに最も感謝すべきことだとおもっているのは、金時鐘さんが「在日朝鮮人語としての日本語」という概念を示してくださったことです。「在日朝鮮人語としての日本語」というのは、日本語なのだけれども、いわゆる普通の日本語ではない日本語、たとえば、天皇をありがたがるような日本語とは違う日本語のことです。また、それと同時に、いわゆる普通の朝鮮語ではない朝鮮語、たとえば、朝鮮語と言えば普通ハングルですが、ハングルではなく日本語で営まれる朝鮮人の言葉としての日本語、ということでもあります。ちょっとわかりにくいでしょうか。「在日朝鮮人語としての日本語」というのは、自明の日本語でも自明の朝鮮語でもない、在日朝鮮人独自のアイデンティティを保証する言葉だ、といえ、わかりやすいでしょうか。どうでしょう。

そもそも金時鐘さんが「在日朝鮮人語としての日本語」や「在日」の概念そのものを生み出したきっかけは、みなさんご存知のように、日本語で営まれていた同人誌『ヂンダレ』、『カリオン』の活動が、民族組織や北の政府から攻撃され疎外されたことで、金時鐘さんが朝鮮半島とはまた別の朝鮮をこの日本で生きてゆかねばならなくなったからでした。(本日のこの場には、『ヂンダレ』、『カリオン』の同人だった鄭仁さんと高亨天さんもお越しになっています)。

金時鐘さん自身は「在日朝鮮人語としての日本語」を次のように言っています。「在日朝鮮人の言葉が、在日朝鮮人語としての日本語をたくわえていけるとき、それは、すぐれて、北にも南にもない朝鮮語の間口ともなれるものであるし、私たちを取りしきっている「日本語」にもまた、慈しみをもって返せる人間のことばともなる」。これは、在日文芸誌『民涛』4号(1998年6月、民涛社・発行、影書房・発売)の座談会で金時鐘さんが発言された言葉ですが、私は二十歳になったとき自分が朝鮮人であることを取り戻そうとして朝鮮語を学べば学ぶほど、朝鮮語が自己の言葉になりえないという、そんな絶望感に苛まれたことがありましたが、のちに金時鐘さんのこの「在日朝鮮語としての日本語」という言葉を理解したとき、在日朝鮮人としての独自のアイデンティティに目覚めることができたようにおもいます。「切れてつながる」という金時鐘さんの有名な思想がありますが、北からも南からも日本からも切れた在日という独立した地平から、また新たに朝鮮や日本につな

がってゆこうとすることがまさに越境であり、ここにも金時鐘さんの「越境する言葉」の力の源があるようにおもいます。

昨今では、ディアスポラ文学や越境文学としての、金時鐘さんの文学への評価はもちろん、私たちが在日朝鮮人文学全体へも評価の目が向けられるようになって来たことを私も実感しています。今日のこのシンポジウムもそのひとつの現れにほかなりません。ナショナリズムや民族主義の自明の言葉を越えて世界へとつながってゆく言葉が越境する言葉だとするなら、自明の国語や民族語の境界を越えた言葉である「在日朝鮮人語としての日本語」や「在日朝鮮人文学」が、国境を越えた地球規模での人間や情報の移動が盛んな現在、見直されたとしてもなんら不思議はないことだとおもいます。金時鐘さんが渡日して70年ということですが、在日外国人が260万人を越えて過去最高だという現在の日本において、渡日した外国人、とくに若い新渡日の人たちが自らのアイデンティティをこの日本で獲得するうえで直面する日本語の問題を考えたとき、金時鐘さんの「在日朝鮮人語としての日本語」を「在日外国人語としての日本語」へと応用して、現在の渡日外国人が引き継いでゆく可能性は大いに期待されることかとおもいます。実際のところ、台湾出身の温又柔さんのように、自明の民族語でも日本語でもない自己のニホン語を追求する作家も現れています。このように今の日本や世界では金時鐘さんの言葉をますます必要とする状況になっているのではないかと、私はそうおもっています。

あえて繰り返して言いますが、金時鐘さんの日本語が持つ越境性や世界性は、祖国朝鮮半島やルーツのことを度外視して成り立つ越境性や世界性では無論ありません。自らの出自の歴史や文化に根差さぬ言葉は、たとえ世界性を語ろうとも、空虚な言葉であるほかありません。国際化やら、アジアや世界の友好平和を声高に唱えても、その言葉が相互の歴史や文化の認識に裏打ちされない限り、虚しく空回りするだけで、新時代の間人間関係は生まれるはずがありません。

今日のこのシンポでは、私は金時鐘さんの日本語について語っていますが、個人的に金時鐘さんとお会いしたときには、先生から「チョンジャンはもう少し朝鮮や韓国と向き合ったほうがいいんじゃないか？」と説教されることも多々あります。「在日朝鮮語としての日本語」が空虚な日本語にならないためには、自他の歴史や文化を知ることが不可欠です。これは「日本人としての日本語」にも同じことが言えるのではないのでしょうか。

ということで、そろそろ時間です。いろいろと駆け足で話しましたが、今日このシンポに参加するにあたって、私が考えたことは、「在日朝鮮人語としての日本語」は越境語であり、世界語であるということ、また逆に自分が詩や文を書くときの「在日朝鮮人語としての日本語」が、越境語として、また世界語としてはたして成立しているかということ、常に自分は意識してゆかねばならないなということをおぼろげに考えさせられたという次第です。

90年というとはぼ100年、今年は3・1独立運動からちょうど100年ですが、金時鐘さんのほぼ一世紀に亘る人生は、そのまま朝鮮民族の歴史を体現している存在だと言えるかとおもいます。そして金時鐘とは在日朝鮮人の歴史と文学を創造し体現している詩人でもあります。植民地時代の半島に生まれ、皇国臣民の生い立ちを経て、戦後すぐ済州四・三から追われて日本に渡り、従事した民族組織から離反し対峙しながら在日朝鮮人の詩を生きてこられました。この日本に金時鐘さんが生きていることは、この日本に朝鮮の歴史が存在するということでもあります。

越境する力を持つ言葉には、歴史と文化の重量が具わっているものです。金時鐘さんの言葉の力と重みは、そのようなかけがえのないものであることを、今日このシンポにお集まりのみなさんとともに確認できることを幸いにおもいます。

金時鐘先生、これからも長生きが仕事だとおもって、どうかお体ご自愛ください。

以上で私の話は終わりです。どうもありがとうございました。